

山と博物館

第 5 卷 第 11 号 1960年11月25日



セイタカシギ

本州には極めて稀に旅鳥又は迷鳥として、来ることがあり、海岸の浅瀬、海岸近くの湖沼に棲息する。この生態写真は牛久沼にて撮影されたもので日本ではじめてのもの。

撮影 羽田健三氏

大町山岳博物館

アピ登行記 (2)

同志社ヒマラヤ遠征隊

平 林 克 敏

チベットに近いブウテイと云う村が、およそ40°以上はあると思われる急斜面の段々畠の中央にありカリー河の流れから遠ざかってガロワール、ヒマラヤの山麓の台地へと登り美しい峠に出た。これを私達はガアービヤンのパスとよび、その台地の上にはタンネの村と広大な草原が広がり、ヤクがゆっくり草をたべ2000頭以上の山羊の群がアピの見える、はるか高遠の麓へと移動して行く、なんとすばらしい眺めであった事か、前方には灰色に近いガアービヤンの死の様な村、そしてはるかカリーの河をへだててチベット高原に達するテンカル越と聖者の住む山がづらなり、右手にはアピの巨峰が奥深くその姿を現わしていた、ガアービヤンの村、地図を見ていつもひそかに自分で想っていた「すばらしい場所」それが今日の前にある。土色の砂地の上に、石とドロで造った50戸あまりの住居、木、草といったものはほんの少し、気をつけてみない限り恐らく目につかない。まったくの、灰色の世界である。この村人は半分がチベット人で少々のグルカ族がまじっていた。人に対するしたしきはきわめてよく、何か、話せば、かならず親切におしえてくれたしジャガイモタマネギ、卵などのこの地方ではごく少ない食糧もわけてくれた。時には私達の為に村の若い女達がブリー（モロコシ、小麦粉をウス焼の様にし油で上げたもの）を造って持って来てくれた。

私達の着いた時は、この村はまだ早春といった感じで雪がまばらにのこり、附近の谷は雪崩のあとが緑の草原にまで達し。緑色の草原に押し出している雪崩のシマもようは、ヒマラヤ独特なものだろう。

我々がベースキャンプを建設したかったアピ谷はまだ雪が深く、す足の人夫は、全員帰ってしまった。初めは、なんとかせねばと、アピ谷の出合の草原に仮のB、Cを設営し、そこから約、1,000m 高い台地まで、全部の荷物を、運ぶ様努力した。人夫のトラブルは続き、ついに全員が賃金を倍にするまで動かないとの事になったので動かなければ我々で上げるから帰れ、と云う事になった。初めの内は、絶対に帰るものじゃない。いわせておけ、と云ったぐあいで、ほおっておいたが、人夫連中の話しはとんでもない方向にきまってしまった。全員、荷背負綱とブランケットを持って立ちさってしまった。この期にいたって、くい止める事は、あまり望みがない。さりとて日本を出る時から金の無い遠征隊の手前、一日 600



アピ頂上の平林氏

円の人夫は、そう長い事使用出来るものではなかったので、ガルツエンに、ガアービヤンの村で、少しでも集めさせ後は自分達で上げる事にした。

30キロ以上の荷物を持って、3,100米のカリー河の三角州から、4,200米のアピ谷の氷河の真端へと、三日間この仕事をした。つぎに4月22日、全員血の出る様な想いで、予定の場所に3つの荷物を集結した。また雪におおわれたこのアピ谷の雪原も下の方は若芽の、いぶきが感じられた。ところどころ、青い大地を、氷をとうして見られる様な草地在り、いくつも見受けられた。

スコップで雪を除け、天幕を建設し、炊事用の天幕から煙が上る頃、我々のベースキャンプは、6張の大型テント村に変わった。

私と、隊長ガルツエンが一張りの大型二重性天幕に入り江上、寺阪、植西の三人で、私より20米ほど下の草地に張り、それを中心に、キッチン天幕、荷物倉庫用、シエルパ天幕、といったぐあいに、一ヶ月以上居る住みかが出来上り、前方のアピ氷河の流れ出る大きなモレーンの大積を利用して出来ている湖水を、洗濯場と炊事場に

使用し、プロパンボンベの調整も高調で大町の田舎の台所よりはるかにすばらしい。ベースキャンプが出来たその頃私達はすでに二隊に分れて行動を初め第一隊はアピ谷の氷河を下り、アピ奥の院と云うべき、氷河湖のほとりに、C1を建設した。4,500米の高所である。

戦前にこの谷に入った、マリーとタイソンの2人が、アピにはルートが無いと報告したのも、当然の事である第一キャンプ附近のアピの側壁は、我々を近づけないくらい、そり立って見えた。どこへ、どの様に、ルートを取って良いのか、まったく見当がつかなかった。記録をたどり、また6年前に来たガルツエンの話して、少々雪は多く状態は変っていたが、すぐ判明した。私と、ガルツエン、寺阪の、三人で、第二キャンプのルート工作に出発した。第二キャンプを、建設する迄に我々は、ヒマラヤに来て、一番問題の多い高度順応について処理すべき大きな問題があったし、その高度に対して全員、順調に登行出来るか、どうかさえ問題であった。こんな様々の問題を持ちながら、私達は、アピの前衛峰6,700米の中腹まで登り、そこからアピの主峰にむかって、トラバースするルートを取った。この前衛峰の中央は上部からの氷柵で完全に、おおわれ、そこから下部は、露出岩となり氷河の後退が良くわかるほど、切り立った、岩氷壁で、行き詰った状態となっていた、この氷柵の行き詰の尾根の末端にC2を建設する事にした、5,800米だった頭が少し痛むと感ずるほどだったが、別にこれといって苦しいとも思わなかった。第二キャンプは私達のアピ登頂を実現する為の、最も主要な高所基礎キャンプになるため4日間以上の荷上を行い、5張の天幕を建設した。

この第二キャンプから6,700米の前衛峰へとトラバースする事が、このアピ登行のかぎでもあったから、第三キャンプとのルート工作は、手に血のにじむ想いで、進めていった。大きな氷壁に、小さなステップを切りきざみ、いつ進むともなく切り続け、約1000米以上の氷壁に道が出来ザイルが固定され、第三キャンプ(6,200米)の建設を容易ならしめるチャンスをつかむ事が出来た。この頃すでに、私達全員は高度順応もとのい、いついかなる高所へ出発してもたえられる十分な体が出来ていた。全員ベースキャンプに降って、休養し3日間休み5月9日に最高キャンプを建設し、5月10日第一回の初登頂を行うべく、出発前にベースキャンプで作戦会議を行い、5月7日BCを出発した。津田隊長と私ガルツエン。3人のシエルパがこれ

に加って一きにC2に上り翌8日第三キャンプを強化する為にさらに一張の天幕を建設し9日には、津田隊長と3人のシエルパにサポートされて、第四キャンプ(6,550米)建設に出発した連日うその様に天候は良く、何か恐ろしいほどの幸運がまっている様だった。

白と黒以外にはなにも一つないこの冷酷なへき地、限りなく静かで、恐ろしいほどの静寂が私達二人の天幕を取りまいていた。夕ぐれる大氷原の中に張られた、最高キャンプの横に立ち、頂上へのルートを目でおった。明日は登らねばならないのだ、理由のないはげしさがそこにあるただ登ればよいのだ。

きっとすばらしいだろう——そう思う私の心は以外に静かであった。

5月10日 登頂の日

強風にたえる、低い天幕、羽根ばかりで出来たシュラフとジャケット、それだけで身動きはらくではなかった6時ガルツエンの作ってくれた。オートミールと桃の缶詰、ウイーハウスをたべて外に出た、すばらしい天気であった。風はガロワールの、インド側より、チベット高原へと吹きさつて行く、完全装備で出発した。なんと登みきった、すばらしいブルーの空その下に広がるチベットの山々、山麓の方だけ、うすく紫色にかすみその下にチベット高原がぼやけてみえた。

太陽はさんさんと輝き青い氷の斜面をなめて私達の影をアピの谷えとおとしていた。クラボンが氷にわずかに、くいこみ、かいてきな登行がつづく。

なんとすばらしいながめである事か、そう思いながら登ったのも、今から考えると6,800米くらいまでの事で、そこからの登りは実に苦しいものとかわった。10米と続かないただ氷の斜面を見つめて、あそこまで登ろう。今度は



第3キャンプより無名峰を望む

あそこまで登るのだと云うぐあいには実にのろのろとしかも確実に進んだ。私のあとからガルツェンが常と同じかんかくで登って来る。実によく動く、ちようど7000米に達した頃だったろう、ガルツェンが後の方で、ザイルを引いて、*what is that* ミとピッケルをさし雪原の上の黒い点をさした。

たしかに何かある、この時ガルツェンがつぶやく様に、パレンギーと云った事をおぼえている。イタリア隊の、登頂にむかった、隊員の名である。私もそう思った。

私とガルツェンは二人で無言のままその黒い点に近づいた。一匹のカモであった、氷のスカブラの横に頭を東に向け、美しい型で死んでいた。7.000米の氷原の上でしかも山の上でカモをひろうとは思わなかった。附近のセラックスの横にそのカモを保ぞんし頂上へとさらに登行を進めた。この頃から、私の行動は実に、らくになった。日本の山での状態と変らないじやないかとさえ思えた。

真青い空をバツクにアビの頂上が雪煙をあげ、これ以上高いところは、このほかにないと云う様に、青黒く光る氷壁につつまれた頂上だ。限り無く広がるチベットの山々、右手にはアビの谷が糸の様に白く光って見えた。あと20米馬の背の様なリッジを30米に近い強風に身をさらされ、ステップを切って登った。もうこれ以上登らなくても良いのだ、そう感じた時、そこは西北ネパール、この地方では唯一の巨峰アビの頂上だった。11時48分、背を西にむけ、ぼう然と立っていた様だ、ふと気が付くと頂上ですべき機械的なおよそ無意味な仕事があった。日本の国旗を出してピッケルに付けガルツェンに写真を取ってもらいそこで何枚かの写真を取った。帰りの事で頭がいっぱいだったのだろう、チャムリヤの深い谷からわき上る雲をみつめながら、写真を取ったそうして私がこの遠征をなしとげた。私の中刻をささえるはと、人達に、その写真を頂上にうめたガルツェンが、私のこの仕事をじつとみつめ、早く降らなくて心配そうだった。

帰りは実に早かった。これだけよくぞ登つたと思うほどこの大雪原は長く、氷壁はアビの谷に落ちている。2時間も降った頃だろうか、第四キャンプが豆の様な見えてきたそのまわりで、二つの点がゆっくり、私達の方へ近づいてくるのがわかった。隊長と寺阪隊員だ。キャンプに着いて、食べた白桃の缶詰は実にうまかった今でもそれを想出す事も出来る。第一回、第二回と二度にわたる登頂に成功して、ベースキャンプに降った時は、もう緑と花の泉にむせぶ様な、ヒマラヤの谷にも春が、



B・Cよりアビを望む

おとずれていた。

小さな花のさみだれる、ベースキャンプの台地に、横たわり風雪にけふる、アビの姿は、私の人生で、わすれがたいものの一つではないだろうか？。

一週間のチベット紀行

国境町村ゲービヤンに降ってから、私達には二隊に別れて、チベットの国境へ出発した。もちろん、許可もなければ、禁じられていた場所ではあったが。二日間にわたって研究しなるとか一週間の学術調査なら出来るという事で、テンカル谷を、さかのぼり、リプレクと云うチベットのタクラコトに、通ずる、谷を上って行った。もう一隊は、ナンパと云う山の調査を兼ね、チベットを通らずに、この西北ネパール山群を越えて、さらに、秘境と云われるサイパルの村から東北に通ずるセテイ河の上流への調査をしたかった。この一週間に実に色々なめずらしい事に出合った。チベットをおわれてくるラマ僧カイラスのマナソラワロワ湖から旅にきているチベットの家族。家そして風俗習慣はすべて、私達が本で読んで知っていた昔のチベットそのものであった。

この記録と写真は実にめずらしい、又多くの、資料を集める事が出来たが、これはまたいつかの機会にこの紙上で発表させていただきます。大町の市民の皆様はもとより、大町山の会、山岳博物館の皆様方に、今度の遠征で種々御協力願いました事を心から感謝致しております。この紙上よりお礼申しあげます。

(遠征隊副隊長 大町市北原町)

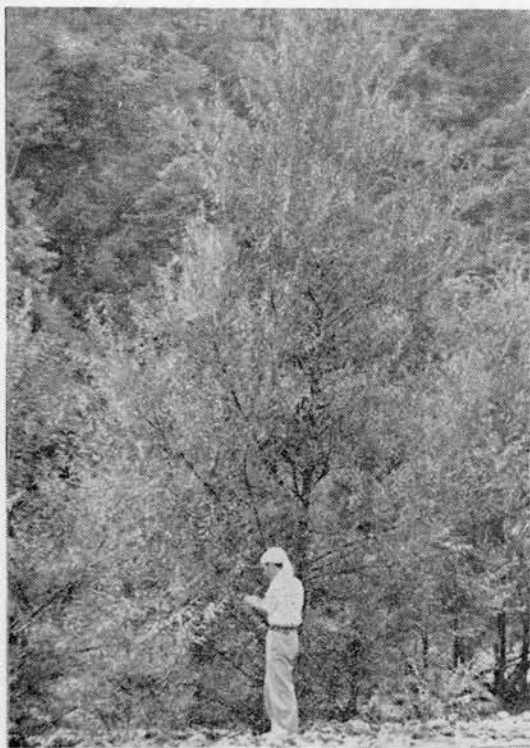
~~~~~長野県南安曇郡下の~~~~~

## ケシヨウヤナギの分布(2)

寺島虎男

安曇小学校内田信太教諭の初めて採集した生品を調べたところ雌木で雌花が沢山着いており花葉共に *Chosenia* に間違い無しと判定、早速東北大学のヤナギの権威者木村有香博士に標本を御送りして確認して頂き、先生も大変お喜びになった。その地点は島々橋を渡り、上高地線と別れて谷川筋を北に上ること約1km、右手にみる中洲である。海拔凡そ800m、下流であるため川幅も広がっている。全株数11は何れも若木で、樹高の平均6m、直径(地上10cm上り)の平均が10.5cmあり、樹高8m(径13.5cm)のものが最大と内田氏が測定している。(D図参照)

次に9月初旬島々橋より谷川土堤そいに約50mの地点、谷川の右側寺院の傍に1本のケシヨウヤナギが見出されたが、これは高さ約4m、径15cmの若木である  
(4) 結び。この珍種 *Chosenia* が兎に角本州としては上記長野県の如き中部山岳地帯の一部だけに偏在分布し他府県には未発見ということで、植物分布上極めて重要な意義をもっている。世界的にみて明かに隔離分布



島々谷のケシヨウヤナギ 立てるは内田氏



(内田氏系図)

である。その理由はここに軽々しく論ずる訳に参らぬので省くこととし只ここでは上記の諸地区に何故不連続的に生育しているかについて論じてみよう。

梓川上流の上高地からその下流の熊倉に到るまで各地区の生態環境上の共通性として挙げてみると、1. 河川の流が大部傾斜ゆるやかな広く展けた河原或いは中洲中であること。2. 基盤が腐葉土と砂礫がヤナギに好適の和合度にある点。3. 日光を充分受け得られる障害物の無い処、等である。山あいの川幅狭く、断崖絶壁にははまれり、夏季に葉の茂る林相には見出し得ないのである。梓川下流不連続分布については昭和20年の洪水の頃より、上流上高地より逐次漂着或は飛来した種子の生長と考えざるを得ない。烏川一ノ沢上流の只の一本の老樹も矢張上高地より飛来した種子の発芽によるであろう。併しその間には大滝山(2615m) 蝶ヶ岳(2664m) 常念岳(2857m)等の列座して障壁が控えていることから、ここを越えて種子が降下するだけの力があるか否かに一応の疑念は起ろうが、学者の説では可能だと云われている。島々谷下流の *Chosenia* の場合は地形的にみて徳本峠を越えた風媒による種子の散布で発芽生長と云うよりむしろ、その自生地点に近い新淵橋下流の *Chosenia* の一団より種子の飛来と考えたいのである。

最後に木村博士が時々申されるように、隣接する高瀬川筋(槍ヶ岳に端を発す)及び岐阜県側の穂岳連峰足下を流れる蒲田川上流等は生育可能性のある地域であり、今後はこの方面に大いに手を延ばして開拓をせねばならないと思う。この稿をまとめるに際し木村有香博士並びに調査に努力された内田信太教諭に厚く感謝の意を表します。(豊科高校講師)

岩石薄片の顕微鏡観察

大町附近の岩石(4)

斜長石

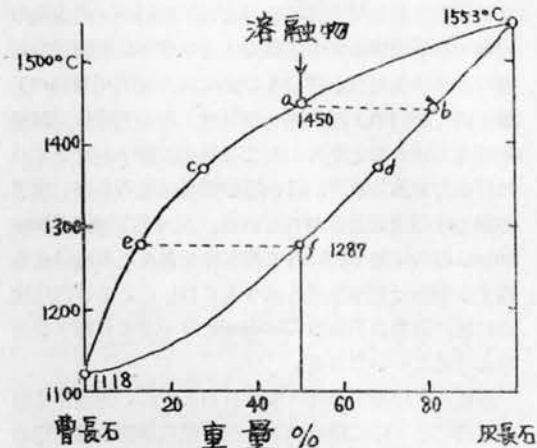
太田昌秀

高瀬川の河原へ行って花崗岩を拾ってみましょう。透明な鉱物(石英)、うす桃色の鉱物(カリ長石)、黒い不透明な鉱物(黒雲母)、の外に白い陶器のような鉱物が沢山入っているのがみられます。又、博物館の裏山にころがっている灰色の岩石を拾ってみると、白い四角な鉱物が点々として入っているのがみえます。これらは両方とも斜長石という鉱物で、ほとんどすべての岩石の中に含まれています。量からみても、地表の岩石を作っている鉱物の半分近くを占めています。このように、ごくありふれた鉱物ですが、それだけに又、岩石の研究するには大切なものなのです。

斜長石のいろいろな性質を調べてみると

- (1)成分・ カルシウムとナトリウムを含むアルミナ珪酸塩 (CaNa) Al (Si,Al)<sub>3</sub>O<sub>8</sub>
- (2)硬さ・ 水晶より軟く、ナイフの刃と同じ位の硬さ(硬度 7)
- (3)比重・ 水の2.6倍から2.7倍位
- (4)融点・ 1100°C~1500°Cの間

これらの性質のうち、比重や融点にある幅があるのはいろいろな成分のちがった斜長石があるからです。すなわち、最も軽くて、融点が高いのはナトリウムの多い斜長石で、これを曹長石と呼びます。(NaAlSi<sub>3</sub>O<sub>8</sub>)。最も重く融点の低いのはカルシウムの多い斜長石 (CaAl<sub>2</sub>Si<sub>2</sub>O<sub>8</sub>) で、灰長石と呼ばれています。斜長石は、このようにナトリウムの多いものと、カルシウムの多いものとがあり、その中間のあらゆる成分のものがあります。すなわち、成分が曹長石から灰長石まで連続的に変化するわけです。



今、岩石を溶かして、だんだん冷やしてくる時のことを考えてみましょう。高い温度でとける鉱物は高い温度で結晶することができます。

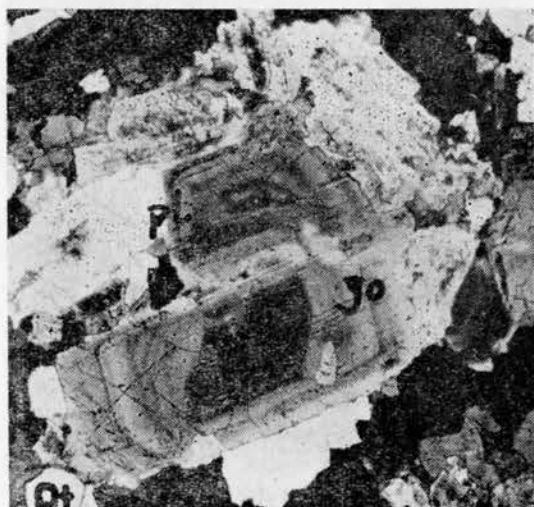
図をみて考えてみましょう。曹長石と灰長石の中間の成分をもった(An50)溶融物があるとします。これは、次

第に冷えてきて、1450°になると、結晶ができません。その時できるのは、b点の成分(An80)をもった結晶です。この結晶は、残りの液と反応しながらだんだんナトリウムの多いものにかわり、最後には溶融物全体が1287°Cで結晶になってしまつて、結晶化は終わります。この時結晶はもとの溶融物と同じ成分(An50)になります。若しこの過程の途中で、できた結晶と残りの液とが完全に反応しないと、先にできたカルシウムの多い結晶が中心部に残つて、そのまわりをあとから結晶したカルシウムの少ない部分がとりまくようにつけて結晶が大きく成長します。このような過程でできた斜長石は写真の中央のもの、ように成分のちがう部分が同心円のようになつてくつきながら大きくなつていきます。斜長石のこのような構造を累帯構造(Zonning)といふます。このような構造ができる条件を考えてみますと、次のような場合が考えられます。

- (1) 冷却の速度がはやすぎて、結晶と残りの液とが充分に反応できなかった時。
- (2) 冷却の速さが一様でなかった時。
- (3) 冷却の途中でよそから物質が加えられたりして液の成分が変化した時。
- (4) 結晶が液の中で動いて、別の成分の場所へ移動した時など。

これらのうち、どの原因のために累帯構造ができるかは1つ1つの岩石でちがいますが、岩石の中に累帯構造をもった斜長石があるときには、その岩石が冷え固る途中で上のうちのどれかの条件を経験してきたということを知ることができるわけです。

燕岳産の花崗閃緑岩中の斜長石 20倍





# 平林高吉氏のワラジ

向山雅重

昭和35年10月27日、大町山岳博物館で民俗資料を見せていただいていると、平林高吉さん(63)が見えた。

平林さんは大町市大黒町の住、はやくから山案内人として北アルプスに入り、黒部溪谷などえも早くから入っており、小柄な体に精悍さが溢れている感じである。もう山案内も止めたからというので、その山仕度一揃いを山岳博物館へ寄贈されてあったのを、さっそく身につけていただいて写真を撮らせてもらった。

ヨッコギをはきハバキをあて、コウカケタビにワラジシャツにハラカケをあてハッピを着、テヌグイで鉢巻。ショイコを背にアカスケ(菅笠)、手にニヅヨ(荷杖)を持ったまことに身軽ないでたち。着るものは皆、紺モメンで作ってあるから、その紺一色の姿が、何ともいえない安定感を与え、まことに真に信頼のおける山案内者という感じである。

ふと、平林さんのワラジをみると、この安曇地方の一般の人のはくものと、ちょっと違う。同じ四乳ワラジではあるが、この地方の普通は、後からのカエリ(返り)の先が、後のチ(乳)え通してあり、そこえヒモ(紐)を通してはく形式なのに、平林さんのはカエリの先が後のチえ通してない。後のチえ緒を通して、さらにカエリの先え通してはく形式になっている——「これは異った形だねえ」ときくと、「このワラジが—ばん穿きいい富山の人はみんなこれだ。このワラジが一番いい」とワラジについていろいろ教えて下さった——この形は、つまりワラジの紐を、前チに通し、さらに後チに通し、カエリに通してある。その左右の紐をそのまま前えもっていき、あとはアシクビの上でアシえ巻きつけ、紐の終わったところで二本の紐をネジカウ。このとき、なるべく脛の内側の方でネジカウ方が、紐がホドケナクテいい。このはき方は、足の甲の上を紐が強く締めることがないから、そこが痛むことがなく足全体を束縛せず軽快、もし川へ入ってアシノウラえ砂が入っても、流れてゆるがせば簡単に流れ出てしまうから都合いい。

黒部の溪へ入るときなど素足えこのワラジをはく。素足だと足の指全部が前え出ているから足が効く。黒部の廊下などはこの素ワラジでないとうちにもいけなかった。黒部に赤マムシの出るところがある。箸ほどの太さの小さい赤マムシ、これがなかなか

か毒が劇しいから、そこへいくとコウカケタビをはく。紺染にはマムシが寄り付かないから安心である。

ワラジは冬仕事のヨナベ(夜業)に作る。これを川の中えフ(浸)てて置き、藁のアクをぬき、さらに雪の中え埋けてサラシて置く。こうして柔らかくなったワラジなら足を擦らない。ワラジを丈夫にするためポロ(襪)をつくりこむ事をするが、冬はポロを使つたのはいけない。ポロが入っていると、どうしても足がすべり易くなる。冬山にはリュックのなかへ、藁シベと赤いトウガラシとを入れていき、甲掛足袋をはくとき足の爪先の方へこのシベとトウガラシを入れて置くと、足が温まって、シミ(凍)にまけなくていい。

ワラジを作るとき、ヒモは二つ折りにして一ヒロ(尋)の長さ。作りはじめは、手のオヤユビとナカユビを一杯にひろげたのではかって軽く二つできめる。前のチの位置は掌の中央からナカユビの先までの長さで測って定め、後のチの位置は、前のチから手の指三本並べの幅だけの長さで定める。後のチから作り止めまでは、ナカユビの先二節の長さをとる。山歩きワラジはあまり幅が広くなく、少しく狭い方がいい。それに、朝穿いて出たら、屋には左右を穿き替えるがいい。誰しも右足と左足とは足癖が違うから、穿き替えないと、横ッパキになったり、片方が先に切れてしまったりするから注意しないとイケない。

「やっぱり、山にはワラジが一番だなあ、今はみんな地下足袋や靴になってしまったけれど」——平林さんはこういってニコリした。平林さんの話は、心をとめて聞くべきものがある。(1960.11.8記)



左足…登山に良いはき方 右足…平地によいはき方

スズメ

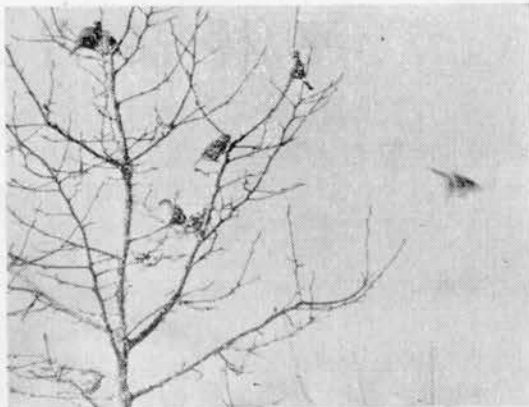
長 沢 修 介

多くの人は雀を石ころか何かのように思って振り返っても見ない。鳥の研究や観察というものは雀では出来ないと思っている人が多い。それは大きな間違いである。私は雀の声や動作で四季のうつり変りを自然の外観よりも早く知ることが多い。青空と実りの群雀、北風と吹雪のふくら雀、早春の喜々とした鳴き声、雀を見ているとそれ自体が自然であり四季のうつり変りでもある。詩人北原白秋はその著書「雀の生活」の中で冒頭に、雀を顧る。それは此の「我」自身を顧るのである。雀を識る。それは此の「我」自身を識ることである。雀は「我」、「我」は雀、畢竟するに皆一つに外ならぬのだ。

こう思うと、掌が合さります、私は。

と述べて雀を見ることは一つの生界を見るに等しいといっております。

又農家にとって雀は全く厄介者にされている。しかし雀の年間の食性を見ると一番穀類を食べているのが1~2月



で70%あとは雑草又5~6月には50%をも昆虫を食べている。秋の実りの時期の9~10月は穀物が40%昆虫が10%あとが野草の種子となっている。

だから一番穀物を食べる1~2月は人間のおこぼれを食べるだけで農家の収穫の時期にさえ雀を追えば雀は害のない可愛い、私達の生活は潤をあたえてくれる動物である

文化祭終る

文化の日から開かれた、大町市恒例の文化祭は5日間行なわれ好評のうちに幕を閉じた。博物館では、本年始めから特に収集に重点がおかれた民俗資料が展示され市民の注目をあびた、その他ジオラマのイヌワシ、ライチョウが追加され昨年のクマ、サルと共に自然園室を一段とにぎやかにした。又講堂では、ヒマルチュリ(ヒマラヤ登山記録映画)花と昆虫、他自作のスライド、8ミリ映画が映写され、小・中・高校生が熱心に観覧した。民俗資料収集に際し、御協力いただいた方々に厚くお礼申し上げます。

資料寄贈

クレンズツ他13点相沢秀和 箱枕他 7点松原美代告 ジョレン相沢金雄 ワラジ他 1点小滝又七 ガマハバキ鷲沢五助 ツグラ相沢重太郎 トックリ他 1点松沢豊太郎 テンゴ他 3点小林正直 ショイコ他 2点永井輝久 メンパ他 2点内山浩 セナカアテ藤林武一郎 セナカアテ松沢秀春 田ノ神様他 1点相沢清 ドウラン他 9点山岸茂次郎 ハコゼン他25点山岸吉一 ショク台松沢庄士 火打箱他 2点松沢儀一 スルス他24点小林浅吉 ワラグツ

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料170円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

他 1点田原君夫 ワカンジキ堀時男 火打箱小林一 オハグロ道具他 2点宮田八十三 トックリ宮田国作 ハイザラエ他 4点宮田徳太郎 ポックズエ他 8点北原孝人 ウマノカンジキ他 7点伊藤武英 タカラ舟他 1点松倉二郎 麻ガヤの一部小林つね子 オオギ中村勇一 カザリサシ宮田重三 カズガラ下条源次郎 日時計他 4点長田種子 タバコ入れ他 7点松下武利 馬グツ横沢静男 アケチグラ内山民弥 ハバキ他 1点中村源作 カタクチ他 6点傘木君 テヤリ荒井作雄 エンショウ入れ荒井久弥 アシカワ他 2点狩野治喜衛 クマノ頭骨他 2点勝山健一 ヒナワ他 9点北沢守栄 ビッケル丸山山市三郎 ボロゾウ丸山徳司 チブクロ他 3点遠山林平 ロウヤ傘木佐市 ジョソウキ他 4点遠山利重 和舟他 1点田中久富 トアミ福島浅吉 ドジョウウケ他 2点伝刀源 アヘルノ卯宮田銀一 セグロカモメ飯森紳 ナンジャモンジャコケ服部植物研究所 古銭商工信用組合大町支店 トラッグミ関菊一 アカシヨウビン松沢勉 タヌキ藤沢折之助 アナグマ丸山巖 カルカモ西沢達郎 アナグマ伊藤栄哉 オオミズナギドリ武田陸男 ネズミ数種北安地方事務所林務課 (敬称略)

山と博物館 第5巻第11号 1960年11月25日発行  
発行所 長野県大町市TEL(大町)211  
大町山岳博物館  
印刷所 大町市上中町  
信州印刷大町工場